

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K19996

研究課題名（和文）日本とアルゼンチンの文化交流に関する研究 1930年代を中心に

研究課題名（英文）A Study of Cultural Exchange between Japan and Argentina in the 1930s

研究代表者

高木 佳奈（TAKAKI, Kana）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助教

研究者番号：10906788

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本とアルゼンチンの間で行われた文化交流について明らかにするものである。日本人移民が定着した1930年代に、藤田嗣治、島崎藤村、有島生馬ら日本の文化人がアルゼンチンを訪れた。彼らが日本人移民とどのような交流を持ち、日系社会を介してアルゼンチン社会にどう紹介されたのかを考察することが目的である。また、作家・鳥類学者ウィリアム・ヘンリー・ハドソンについて、日本との交流という観点から研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アルゼンチンを訪れた日本の文化人たちが現地のメディアに大きく取り上げられ、日系社会の地位向上にも影響を与えたことが明らかとなった。アルゼンチンでの調査ではフジタと交流を持った日本人移民の遺族から話を聞き、アルゼンチン滞在中の写真など貴重な資料の提供を受け、日系移民がフジタを経済的に支援していたことも明らかとなった。

2022年はハドソン没後100周年にあたり、日本語への翻訳や、子孫を通じた日本との交流に関する論文を執筆した。ハドソンの姪がアルゼンチンに移住した日本人と結婚したことをきっかけに、ハドソンが日本・アルゼンチン友好を象徴する存在として語られてきたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study explores cultural exchanges between Japan and Argentina in the 1930s. In that decade Japanese intellectuals such as Leonard Tsugouharu Foujita, Toson Shimazaki, and Ikuma Arishima visited Argentina, where Japanese immigrants had settled. This study aims to reveal how they interacted with Japanese immigrants and how they were introduced to Argentina through the Japanese community. This research also analyzes the work of William Henry Hudson, a novelist and ornithologist, from the viewpoint of these interactions with Japan.

研究分野：ラテンアメリカ文化研究

キーワード：アルゼンチン 日系社会 文化交流 島崎藤村 有島生馬 藤田嗣治 ウィリアム・ヘンリー・ハドソン

## 1. 研究開始当初の背景

120年以上前から日本人が移住したアルゼンチンでは、戦前から日本人移民が様々な日本文化紹介を行い、日本とアルゼンチンの架け橋となってきた。アルゼンチンに定住した日系人はどのような文化的アイデンティティを形成してきたのか。アルゼンチンにおける「日本」や「日本人」に対するイメージは、どのように築かれていったのか。またそのイメージの変遷に、文化交流はどのように影響したのか。これらを明らかにするため、日系人による日本文化紹介と、アルゼンチンを訪れた日本の文化人の活動を調査する必要があると考えた。本研究では、取り上げ、日系移民が定着した1930年代にアルゼンチンを訪れた日本の文化人の足跡と、日系社会との交流を明らかにする。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、1930年代にアルゼンチンを訪れた日本の文化人について、その活動の詳細と日系社会に与えた影響を明らかにすることである。本研究では藤田嗣治(レオナルド・フジタ)(1886-1968)、島崎藤村(1872-1943)、有島生馬(1882-1974)らの滞在が日系社会の文化活動やアルゼンチン社会との文化交流にどのような影響を与えたのかを明らかにする。

画家のフジタはパリで成功を収めた後、1931~1933年の間に中南米を旅行し、1932年3~7月までアルゼンチンに滞在した。ブエノスアイレス、ロサリオ、コルドバで展覧会を開催し「フジタブーム」を引き起こしたと言われる。日本ペンクラブ初代会長の藤村は1936年にブエノスアイレスで開催された第14回国際ペンクラブ大会に有島生馬とともに出席し、日系社会を訪問した。先行研究でも指摘されているように、フジタも藤村もアルゼンチンの日系移民と交流を持ち、日系社会から盛大な歓迎を受けた。母国の著名人がアルゼンチンを訪れ、現地のメディアでも大きく取り上げられたことは、日本人移民にとって重要な出来事であった。それ以前にも日系社会では様々な文化活動が行われていたが、日本からの文化人の訪問が大きな刺激となり、日系社会も活性化したと考えられる。本研究ではフジタ・藤村・生馬のアルゼンチン滞在与日系社会との交流について、その詳細を明らかにする。

本研究は、これまで取り組んできた日系人による日本文化紹介に関する研究同様に、日本とアルゼンチンの文化交流史を捉え直す試みの一環である。将来的にはアルゼンチンにおける日系人の文化的アイデンティティ形成や、「日本」のイメージの変遷を明らかにする研究へと発展させる予定である。

## 3. 研究の方法

### (1) 現地新聞報道の調査

アルゼンチンで発行された日本語新聞及びアルゼンチンの主要紙を調査し、フジタ、藤村、生馬の訪問がどのように報じられたのかを調査した。1~2年目は新型コロナウイルス感染症の影響によりアルゼンチンで調査を行うことが出来なかったため、主に国内で調査を行った。日本語新聞に関しては、国立国会図書館にて『週刊ブエノスアイレス』及び『亜爾然丁時報』の記事を収集した。アルゼンチンの主要紙については、研究協力者のパウラ・オジョス・ハットリ氏(ブエノスアイレス大学)にアルゼンチン国会図書館及びアルゼンチン日系社会歴史アーカイブ(Archivo Historico de la Colectividad Japonesa en la Argentina)での調査を依頼した。

### (2) アルゼンチンでの資料収集及び聞き取り調査

2023年8月にブエノスアイレスで調査を実施した。アルゼンチン国会図書館や国立美術館等で資料を収集した他、フジタと交流のあった日系移民の遺族に聞き取り調査を行った。またフジタのアルゼンチン滞在について研究しているパウリーナ・イグレシアス氏(コルドバ大学)とも意見交換を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 島崎藤村・有島生馬について

国内では、岐阜県中津川市と長野県小諸市の藤村記念館及び長野県信州新町の有島生馬記念館で調査を行った。中津川市の藤村記念館では、ペンクラブ関連資料だけでなく、藤村がアルゼンチンで入手したと思われる貴重なスペイン語文献や、日本人移民に関する資料も目にする事ができた。また藤村の蔵書の中にはスペイン語の語学書も見つかり、アルゼンチン渡航のために準備をしていたことが明らかとなった。小諸市の藤村記念館では、南米旅行の写真や原稿等を調査することが出来た。

アルゼンチンの主要紙に掲載された藤村・生馬のインタビュー記事を分析し、研究協力者のハットリ氏と共にメキシコシティで開催された国際シンポジウムで口頭発表(オンライン)を行った。

た。藤村は「戦争協力者」として批判されることもあるが、「お互いをもっと知って欲しい」という思いを抱いて国際ペンクラブ大会に参加していたことが明らかとなった。現在、この口頭発表を元にした投稿論文の準備を進めている。

#### (2) 藤田嗣治について

藤村・生馬に関する研究同様に、フジタについても日本語新聞やアルゼンチンの主要紙の関連記事を収集することができた。フジタの直前にアルゼンチンを訪れた画家の矢崎千代二（1872-1947）についても資料を収集した。

アルゼンチンでは、フジタの作品を所蔵している国立美術館にて、絵画作品を調査した。フジタと交流のあった日系移民の遺族への聞き取りの結果、長旅で経済的に困窮していたフジタを、日系団体や日系移民が支えたことが明らかとなった。またアルゼンチン滞在中に撮影されたフジタの写真等、貴重な資料の提供を受けた。

#### (3) ウィリアム・ヘンリー・ハドソンについて

2022 年は英国で活躍したアルゼンチン生まれの作家、鳥類学者ウィリアム・ヘンリー・ハドソン没後 100 周年という節目の年であり、当初の計画を変更してハドソンについて調査を行った。ハドソン自身はアルゼンチンを離れ英国で執筆活動を行い、日本を訪れたこともなかったが、彼の子孫や作品を通じた交流が現在まで続いており、日本とアルゼンチンの文化交流史において重要な存在である。ハドソンの姪がアルゼンチンに移住した榛葉賛雄（1884-1954）という日本人と結婚したことをきっかけに、日本とアルゼンチンの間で様々な交流が行われ、ハドソンは両国の友好関係を象徴する存在となっている。

榛葉はアルゼンチンに移住した日本人の中でも最初の正式移民とされており、日本文化普及のための文化団体の設立に携わり、スペイン語で日本に関する本を出版するなど、日本とアルゼンチンの交流に大きく貢献した人物である。娘のビオレタはブエノスアイレス大学を卒業し日系人初の学士号取得者となり、後にハドソン博物館の館長を務めた。本研究のためにハドソン博物館から多くの資料提供を受け、ハドソンに関するものだけでなく、榛葉家や戦前の日系社会の貴重な資料を入手することが出来た。

2022 年 10 月には、ハドソン没後 100 周年を記念する国際シンポジウムがオンラインで開催され、ハドソンと日本の繋がりや日本語への翻訳について発表した。11 月には日本国内でオンラインの講演会を行い、日本におけるハドソンの受容について論じた。これらの口頭発表を元に、スペイン語で論文を執筆した。日本におけるハドソン作品受容の特色として、南米移住のための情報源、映画『緑の館』の原作、児童文学への翻案、南米博物学への関心、英語学習の教材という五つの点があったことを明らかにした。残念ながら近年では日本でもアルゼンチンでもあまり読まれなくなった作家だが、戦前から翻訳が多数出版され幅広い年齢層に親しまれただけでなく、日本人移民との繋がりから、日本・アルゼンチン友好に貢献したことを明らかにした。

#### (4) 今後の展望

本研究は、新型コロナウイルス感染症の影響により 1 年間延長し、3 年目にアルゼンチンでの調査を実施した。しかし計画変更により海外調査の期間を十分に確保することができず、論文の執筆も遅れている。2024 年度中を目標に、藤村と生馬のアルゼンチン訪問に関する論文を執筆する予定である。また本研究では主に新聞報道からフジタや藤村のアルゼンチン訪問を調査したが、日系移民の創作活動への影響についても調査する必要がある。

3 年間国内外で調査を実施した結果、アルゼンチンを訪れた日本の文化人たちが現地のメディアに大きく取り上げられ、日系社会の地位向上にも影響を与えたことが明らかとなった。今後もアルゼンチンで資料収集を行い、日本とアルゼンチンの間で行われた文化交流について調査したい。本研究では 1930 年代を中心に取り上げたが、今後は戦後の活動にも対象を広げ、日本・アルゼンチン交流史を文化面から捉え直したいと考えている。

#### <参考文献>

Iglesias, P., "Leonard Tsuguharu Foujita en Cordoba y la adquisicion de Pensive (1932)", Marta Fuentes y Carolina Romano, *Constelaciones Visuales* 2022, 81-108.  
Robinson, G. & Jacobowitz, S. (2021) "Foujita Discovers the Americas: An Artist's Tour" Discover Nikkei (<http://www.discovernikkei.org/en/journal/2021/1/7/leonard-foujita-1/>).

稲賀繁美「ブエノスアイレスの雪舟、サンパウロの芭蕉：島崎藤村の国際ペンクラブ参加と「最も日本的なるもの」<1936>をめぐる講演の周辺」日本・ブラジル文化交流，2009，111-126.

岡英里奈「『巡礼の旅』のポリティクス 島崎藤村の南米訪問とその語り」『跨境 日本語文学研究』(3)，高麗大学日本研究センター，2016，35-50.

酒井一臣「島崎藤村の南米行 「国民外交」の視点から」京都橘大学研究紀要 (41)，2014，

17-29.

日本アルゼンチン交流史編集委員会『日本アルゼンチン交流史 はるかな友と 100 年』日本アルゼンチン修好 100 周年記念事業組織委員会, 1998.

林洋子『旅する画家 藤田嗣治』新潮社, 2018.

目野由希「南米の島崎藤村 国策的国際文化交流の再考」『文学研究論集』(35), 筑波大学比較・理論文学会, 2008, 109-146.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kana Takaki	4. 巻 87
2. 論文標題 La conexión entre Japon y la Argentina a través de Guillermo Enrique Hudson: un recorrido por sus vínculos familiares, traducciones y recepción	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Letras (87): Numero monografico: Hudson, alla lejos y aqui cerca	6. 最初と最後の頁 15-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.46553/LET.87.2023.p15-35	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Kana Takaki y Paula Hoyos Hattori
2. 発表標題 “Deseo que nos conozcan mejor”: la visita de Toson Shimazaki a la Argentina (1936) a partir de las fuentes locales
3. 学会等名 Coloquio Internacional de Estudios de Arte y Cultura Iberoamerica-Japon, Centro Nacional de Investigacion, Documentacion e Informacion de Artes Plasticas (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kana Takaki
2. 発表標題 Guillermo Hudson entre Japon y la Argentina: de las traducciones y la recepción a los vínculos de familia
3. 学会等名 Simposio Internacional “Alla lejos y aca cerca” en conmemoracion de Guillermo Enrique Hudson (1841-1922), a cien años de su muerte, Pontificia Universidad Catolica Argentina (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高木佳奈
2. 発表標題 日本・アルゼンチン友好の象徴としてのハドソン ウィリアム・ヘンリー・ハドソン没後100周年にあたって
3. 学会等名 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所講演会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	オジヨス・ハットリ パウラ (Hoyos Hattori Paula)	ブエノスアイレス大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------